

くり や もと い せき
栗 屋 元 遺 跡

2006年3月

長野県飯田市教育委員会

くり や もと い せき
栗 屋 元 遺 跡

2006年3月

長野県飯田市教育委員会

序

栗屋元遺跡が位置する上郷地区は、飯田市の北部にあり、天竜川河岸から木曾山脈前山の麓までの東西に細長い範囲を占め、川沿いの平坦地から段丘面・扇状地等に比較的広い耕地が広がっています。このような地形を活かして古の時代より人々は生活し、多くの文化・伝統をこの地に残してきました。例えば、その中のひとつが300年余り続く人形浄瑠璃の黒田人形芝居です。下黒田諏訪神社の祭礼で毎年奉納上演され、人々を楽しませてきました。

上郷地区は元来農業を基盤とする地域でありましたが、飯田市街地に近いことや、農業後継者の不足等から、最近では宅地化が急速に進んでおります。また、道路も国道153号バイパス・県道飯島飯田線バイパス等が建設されるなど交通の便も改良され、日に日にその姿を変えております。今次調査された場所もバイパスの付近であり、その一端を示しています。

しかし、その変化の中でも文化財の保護という面も考えなければならず、時として相容れない事態に直面することがあります。それ故、事前に発掘調査を実施して記録保存を図ることも止むを得ないことといえましょう。

今回の調査では縄文時代中期の住居址が4軒、弥生時代の住居址が1軒発掘され、人々が古くからこの地で生活していたことがわかってきました。

文化財の保護と活用は、文化財行政の大きな課題です。幸い市民の皆さんの活発な生涯学習・地域学習の中で、自分たちの先人が残した文化財や地域の歴史を学びたいという欲求は大きくなっています。私たち文化財行政・教育行政に携わる者はこのような要望に応え、市民の皆さんにご理解をいただきながら、一体となった取り組みができるよう一層の努力をしていかなければなりません。

最後になりましたが、調査実施にあたり文化財保護の本旨に多大なご理解とご協力をいただきました地権者の長谷川昌博さんをはじめ、本調査に関係された全ての皆様方に深く感謝を申し上げます。

平成18年3月

飯田市教育委員会

教育長 伊 澤 宏 爾

例 言

1. 本書は、集合住宅建設に先立ち実施された、飯田市上郷地区所在の埋蔵文化財包蔵地栗屋元遺跡の緊急発掘調査報告書である。
2. 調査は、上郷別府2697-1長谷川昌博からの委託を受け、飯田市教育委員会が実施した。
3. 調査は、平成16年度に現地調査、平成17年度に整理作業及び報告書刊行を行った。
4. 現地での調査は坂井勇雄・佐々木嘉和が担当し、整理作業は坂井勇雄が担当した。
5. 発掘調査及び整理作業にあたり、遺跡略号に地番を付しKKT2700-1を用いた。また、遺構については右記の略号を使用している。 竪穴住居址-SB 土坑-SK
6. 本書の記載は、住居址・土坑の順に記載してある。
7. 土層の色調、土性については、小山正忠・竹原秀男 2005『新版標準土色帖』を用いている。
8. 土器実測の一部については瞬シン技術コンサルに委託した。
9. 遺物実測図の縮尺については、下記のとおりである。
土器 復元実測図1/4 拓本及び断面1/3 土製品1/3 石器1/3及び2/3
10. 本書に関わる図面の整理は、調査員・整理作業員の協力により、坂井勇雄が行った。
11. 本書は坂井勇雄が執筆・編集し、馬場保之が校閲した。
12. 遺構写真は調査担当者が撮影し、遺物写真撮影は西大寺フォト杉本和樹氏に委託した。
13. 本書に関連した出土遺物及び図面写真類は飯田市教育委員会が管理し、飯田市上川路1004-1 飯田市考古資料館に保管している。

目 次

序	①13号住居址	9
例言	②14号住居址	9
目次	③9号住居址	10
	④12号住居址	10
	⑤11号住居址	10
第1章 経過	(2) 土坑	
第1節 調査に至るまでの経過	①土坑96	12
第2節 調査の経過	②土坑97	12
第3節 調査組織	第4章 まとめ	
第2章 遺跡の環境	第1節 これまでの栗屋元遺跡における調査	21
第1節 自然環境	第2節 9号住居址、12号住居址出土の土器について	21
第2節 歴史環境	第3節 遺跡の様相	22
第3章 調査結果	写真図版	
第1節 調査区の設定	報告書抄録	
第2節 基本層序		
第3節 遺構・遺物		
(1) 竪穴住居址		

第1章 経 過

第1節 調査に至るまでの経過

平成16年2月24日付けで飯田市上郷別府1697-2有限会社地興建設 代表取締役 倉田吉明より飯田市上郷黒田2700-1他における集合住宅建設にかかる土木工事等のための埋蔵文化財発掘の届出書が提出された。

当該地は埋蔵文化財包蔵地栗屋元遺跡の一面に位置する。本遺跡では上郷町時代の昭和60～62年度に町道改良工事、信越郵政局職員宿舍建設に先立つ発掘調査が行われており、縄文時代から奈良時代にかけての遺構・遺物が確認されている。このような埋蔵文化財の状況のため、事業実施に先立ち予備調査を実施し、その結果に基づいて改めて協議することとなった。

諸協議を経て、平成16年3月9日予備調査に着手し、重機によるトレンチ調査を行った。調査の結果、縄文時代中期後葉の住居址と思われる遺構3軒と遺物の出土を確認し、当日埋め戻して全ての調査を終了した。

予備調査終了後に再度開発者側と協議をした結果、建物部分に関し発掘調査を行い、記録保存をすることとなった。

第2節 調査の経過

以上の経過を経て、平成16年3月19日、上記事業の施主である飯田市上郷別府2697-1 長谷川昌博と飯田市長 田中秀典の間で「飯田市栗屋元遺跡発掘調査に関する協定書」及び「飯田市栗屋元遺跡発掘調査業務（平成16年度）委託契約書」を締結し、翌年度現地での発掘調査に着手することとした。

翌平成16年度の4月6日より現地での調査を開始した。調査区が住宅地の中に位置し、排土置場が限られるため、調査区内を2回に分けて調査することとした。1回目は西側半分を対象とし、4月6日に重機による表土剥ぎ作業を行い、8日より基準点設置作業及び作業員による遺構検出作業を開始した。竪穴住居址・土坑等を検出し、順次掘下げて精査を行い全体及び個別の測量調査、写真撮影を実施して14日、西側部の調査を終了した。翌15日に重機による東側部分の表土剥ぎ作業を行い、16日より再び作業員による遺構検出作業を開始した。前半同様に竪穴住居址の掘下げ作業、測量調査、写真撮影を実施し、26日に全ての調査を終了した。終了後の29日、現地見学会を実施し、約50名の参加を得た。

その後、飯田市考古資料館において、出土遺物や現地で記録された図面・写真類の基礎的整理作業を行った。

平成17年度は引き続いて整理作業・報告書刊行を行うこととなった。4月25日より出土遺物の水洗・注記・土器接合・回復元・土器、石器実測・写真撮影・トレース・版組等を順次行い、発掘調査報告書を刊行した。



挿図1 調査遺跡位置図

(1) 現地作業日誌

- 平成16年4月6日(火) 重機による表土剥ぎ作業
4月7日(水) 基準点設置・テント設置・調査区内検出作業
4月8日(木) SB09、SK96、97検出・攪乱掘り下げ
4月9日(金) SB09掘り下げ
4月12日(月) SB09掘り下げ
4月13日(火) SB09埋嚢検出
4月14日(水) SB09埋嚢取り上げ・調査区全景写真撮影
4月15日(木) 東側調査区、重機による返し作業及び表土剥ぎ作業
4月16日(金) 基準点設置・SB11、12、13検出
4月19日(月) SB11精査・雨のため午前で作業中止
4月20日(火) SB11写真撮影・SB12先行トレンチ調査
4月21日(水) SB12掘り下げ
4月22日(木) SB12掘り下げ
4月23日(金) 雨のため作業中止
4月26日(月) SB12完掘・調査区全景写真撮影・調査機材撤収 現地での調査を終了
4月29日(木) 午前11時より現地見学会(見学者約50名)

第3節 調査組織

(1) 調査団

調査主体者	飯田市教育委員会	教育長	富田 泰啓(～平成17年3月3日)		
			伊澤 宏爾(平成17年3月4日～)		
調査担当者	坂井 勇雄	佐々木嘉和			
調査員	馬場 保之	澁谷恵美子	下平 博行	羽生 俊郎	
現場作業員	北原 裕	小島 康夫	瀬古 郁保	竹本 常子	橋 千賀子
	福沢トシ子	松下 省三	柳沢 謙二		
整理作業員	金井 照子	小平まなみ	中村地香子	樋本 宣子	福沢 育子
	松本 恭子	宮内真理子	森藤美知子	吉川 悦子	

(2) 事務局

飯田市教育委員会					
教育次長	尾曾 幹男(～平成16年度)	中井 洋一(平成17年度～)			
生涯学習課長	小林 正春				
文化財保護係長	吉川 豊(～平成16年度)	馬場 保之(平成17年度～)			
文化財保護係	宮澤 貴子(平成17年度～)	澁谷恵美子	佐々木行博(～平成16年度)		
	下平 博行	坂井 勇雄	羽生 俊郎(平成17年度～)		



挿図2 調査位置及び周辺地図

第2章 遺跡の環境

第1節 自然環境

当遺跡が存在する飯田市上郷地区は、長野県南部を南北に走る木曾山脈と、赤石山脈の西側を並走する伊那山脈との間に広がる伊那盆地南端にあり、その中央部を天竜川が南流する。この天竜川とその支流により形成された西側段丘上に上郷別府は所在する。

『下伊那の地質解説』によれば、伊那谷の段丘は火山灰層を基準として、高位面・高位段丘・中位段丘・低位段丘Ⅰ・低位段丘Ⅱの5段階に編年されている。

上郷地区の地形の特徴として、地区の中央部を南北に横断する大段丘があり、これを境として俗に上段（うわだん）と呼ばれる洪積土壌地帯の中位段丘及び低位段丘Ⅰと、下段（しただん）と呼ばれる沖積土壌面の低位段丘Ⅱが見られ、その段丘崖の比高は約50mを測る。

上段の中位段丘・低位段丘Ⅰ地帯は天竜川の現河床面海拔398mとの比高差200～80mを測り、野底山山麓から南東方向に緩やかに傾斜する広大な地域を占めており、野底川による新期扇状地が発達し、総体とすれば乾燥した台地をなしている。この中位段丘・低位段丘Ⅰ地帯は三大別でき、南西側に中位段丘下段岡面、北東側に中位段丘八幡原面があり、いずれも細長く小高い丘陵地形を呈している。この間の地域が低位段丘Ⅰ伊久間面である。

下段の低位段丘Ⅱはさらに南条面・別府面・飯沼面と細分される。南条面は現在の天竜川の河床に続く最低位の沖積段丘で、標高398～408mの間にあり、現河床との比高は2～3mである。別府面は南条面の一段上に位置する段丘で、標高408～418mに位置し、その比高差は約2mである。

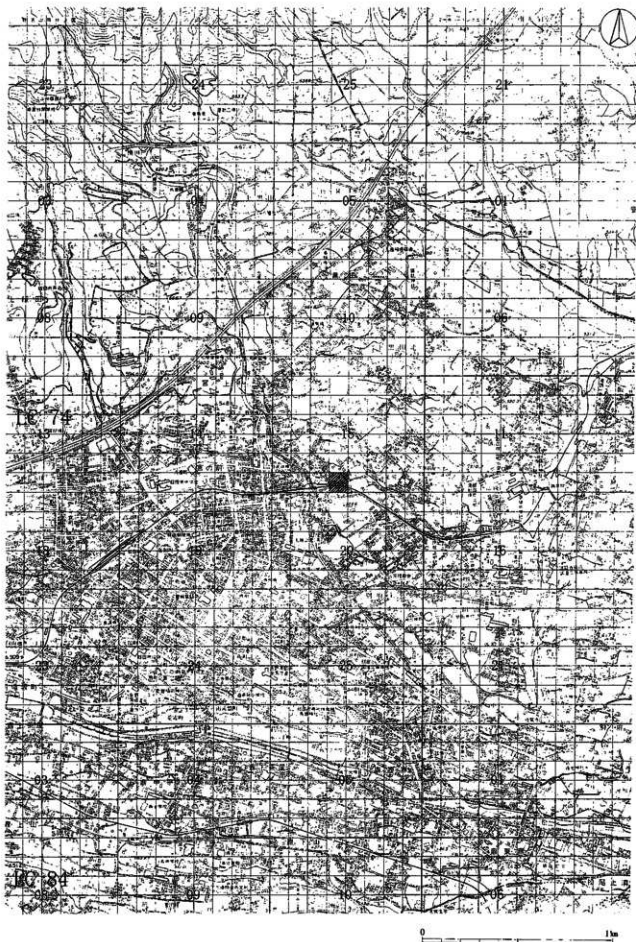
当遺跡が所在する場所は、上段の野底川の左岸に面する中位段丘の中間に位置し、標高530～540mで続く見晴山の段丘の西南崖下において、標高490～510mの緩やかな傾斜面が細長く続く場所である。

見晴山の段丘崖下に低湿地を控え、西側の段丘縁辺にかけて居住に適したやや高燥な部分が広がるが、今次調査区は段丘縁辺部に隣接する位置であり、居住に適した場所である。

第2節 歴史環境

上郷地区の遺跡を概観すると、天竜川・野底川の氾濫原及び、段丘崖を除いてほぼ全面的に包蔵地であり、大正13年島居竜蔵博士が『下伊那の先史及び原始時代 図版』を編纂するのに先立ち、市村成人と郡下を探訪してから特に知られるようになった。戦後は市村・大澤和夫を中心に『下伊那史』第二・三巻、『信濃史料』第一巻、『全国遺跡地図 長野県版』を刊行する過程で、上郷地区内の遺跡や古墳を明確にしてきた。昭和50年代に入ると、この分布図をもとに今村善興が『上郷史』で、また岡田正彦が『長野県史 考古資料編』で遺跡分布図一覧表の作成にあたった。昭和57年度には、上郷町教育委員会が調査主体者となり遺跡詳細分布調査を実施し、平成5年度に飯田市との合併後、平成7年度に飯田市教育委員会による市内遺跡詳細分布調査が行われている。

地区内の遺跡は、その大半が複合遺跡であるが、旧石器時代の遺構・遺物は現在のところ確認されていない。当地区最古の文化は、上段の姫宮遺跡や黒田大明神原遺跡出土の表裏縄文土器と、黒田柏原遺跡（柏原A遺跡）出土の石器剥片、宮垣外遺跡出土の有舌尖頭器などにより、縄文時代草創期からその黎



挿図3 基準メッシュ図区画調査位置図

明を知ることができる。縄文時代早期になると、比較的山麓部に位置する八王子遺跡など5遺跡から、押型文土器・繊維を含む条痕文土器・燃系土器が出土しており、黒田大明神原・西浦遺跡の発掘調査において該期の住居址が確認されている。

縄文時代前期の遺跡は、姫宮・日影林・高松原・黒田大明神原遺跡などがある。以前は、遺跡の分布域は野底山系の山麓部から低位段丘Ⅰにあり、下段の飯沼・別府地籍から発見されず、沖積地帯への進出はなかったと考えられてきた。しかし、昭和62年度に実施された矢崎遺跡の発掘調査において前期後半の竪穴住居址が確認されたことで、段丘地形の大半に人々の営みのあったことが窺える。

縄文時代中期になると、低位段丘Ⅱの南条面下段を除き、上郷地区全域に遺物の散布が確認されており、人々の生活の舞台が拡散したことを示している。これまで調査された主なものとしては黒田大明神原・平畑・増田・垣外・丹保遺跡等があげられる。

縄文時代後・晩期になると遺跡は極端に減少し、特に後期では上段を中心として日影林遺跡でまとまった資料が得られているが、晩期については矢崎遺跡に当該資料がある他は詳細不明である。

弥生時代は、稲作を主体とした文化であり、飯田・下伊那地方へは東海地方から東漸したものと考えられる。その始まりの時期として、矢崎遺跡から出土した条痕文土器は文化の波及を考える上で貴重な資料といえる。稲作が定着する中期になると、薮越・丹保・堂垣外遺跡など下段地帯に遺跡が拡大する。南条面に立地する飯沼柳田遺跡では、弥生時代の水田址が発見されている。該期の遺跡の大半は、低位段丘Ⅱの飯沼・別府地籍に集中することから、この一帯に見られる湿地帯を利用しての稲作が推測される。後期になると、低位段丘面上の遺跡はより発達し、さらに高位段丘面まで遺跡が拡大し、水田による稲作ばかりでなく、雑穀類の畑作も作業の一翼を担ったと考えられる。調査された遺跡も多く、上段の高松原・垣外・原の城遺跡、下段の丹保・兼田遺跡などがある。中でも、丹保遺跡は後期全般にわたる拠点集落の一つといえる。

古墳時代においては、上郷地区の古墳は現在のところ消滅した古墳も含めて35基が確認されており、その多くは別府地籍の台地端に立地する。中でも、県史跡に指定されている飯沼天神塚古墳は、全長74.5mの伊那谷最大級の前方後円墳として知られており、細長い羨道部を特徴とする横穴式石室を有する。また、飯沼天神塚古墳の南東約180mに位置する溝口の塚古墳が平成8・9年度に発掘調査され、竪穴式石室を有する墳丘長約50mの二重周溝を持つ前方後円墳であることが確認された。この結果5世紀後半から6世紀にかけての上郷地区の首長墓系列を追う事ができ、当地区の重要性も再認識されることとなった。該期の集落そのものの調査例は少なく、実態は不明であるが、低位段丘においては、段丘端部を墓域とし、豊かな経済基盤の想定される下段の地域を中心に展開していたものと考えられる。

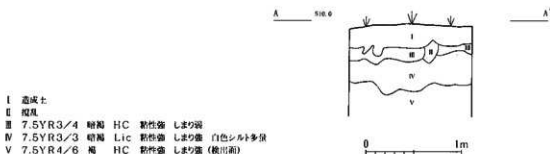
奈良・平安時代の遺跡は60数ヶ所を数え、ほぼ地区内全域に分布する。特に、低位段丘Ⅱに位置する堂垣外遺跡は古墳時代から平安時代までの集落であるが、遺物・遺構から伊那郡衙との強い結びつきが考えられる。また矢崎遺跡では、平安時代の住居址が確認されるとともに、大規模な鍛冶遺構と大量のフイゴ羽口や鉄滓が検出され、その役割が目目されている。この低位段丘Ⅱ一帯は、古代伊那郡衙址である座光寺地区の恒川遺跡群と同一段丘面にあたり、古代条里制遺構の存在が地割と地名から推測され、古代史研究上注目すべき地域であるといえる。

第3章 調査結果

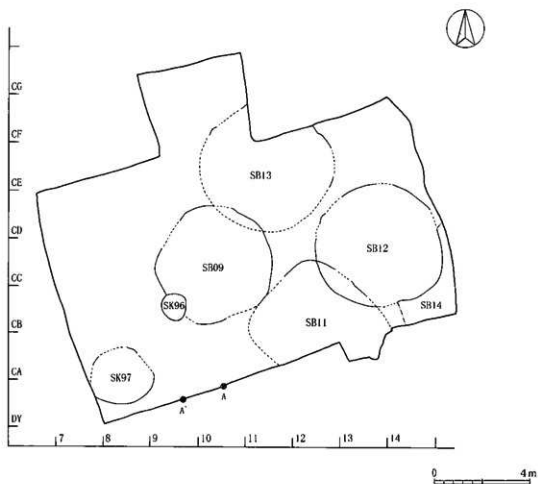
第1節 調査区の設定

調査区は、世界測地系に基づく新飯田市埋蔵文化財基準メッシュ図により設定した。今次調査区はLC 74 15-44に位置する。(挿図3)

第2節 基本層序 (挿図4)



挿図4 基本層序



挿図5 遺構分布図

第3節 遺構・遺物

(1) 竪穴住居址

①13号住居址 (SB13) (挿図6)

遺構 CE11を中心に検出した。部分的な攪乱、東側の一部が調査区外のため全体の3分の2を調査した。壁面は不明で、床面、柱穴での確認である。前半の西側調査区でピットの一部、遺物は確認していたが、後半の東側調査区での調査で住居址の存在が判明した。SB09に切られる。規模は推定で5.3m×5.3m、平面形は円形を呈す。主軸方位はN44°Wを示す。床は全体的にルームを固く締めている。周溝は北側から東側壁下にかけて部分的に検出した。住居址内でのピットは7基確認されたが、支柱穴と思われるものはP1~P3、P5、P7の5基である。中央より北側に寄った位置に焼土が集中している部分があり、炉址と推測される。

遺物 (挿図10・16) 床面より細隆線土器の深鉢、瓢箪型の深鉢、打製石斧、横刃形石器、石錘が出土している。

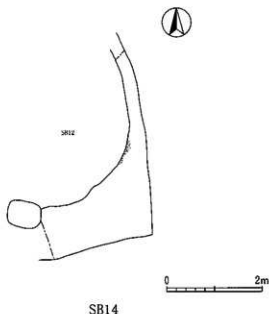
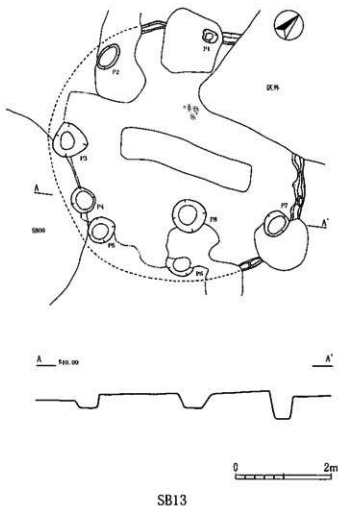
時期 遺物より縄文時代中期中葉末に位置づけられる。

②14号住居址 (SB14) (挿図6)

遺構 CB14を中心に検出した。床面のみの確認で、全体の3分の1を調査した。東側の調査区外に広がると思われる。SB12に切られる。規模、主軸方位、内部施設は不明である。部分的ではあるが、焼土が見られる部分があり、炉址の可能性はある。

遺物 (挿図10・16) 土器破片資料、石錘が少量出土している。

時期 遺物より縄文時代中期中葉末に位置づけられる。



挿図6 SB13・14

③9号住居址 (SB09) (挿図7)

遺構 CC10を中心に検出した。西側部分で一部攪乱を受けているがほぼ全体を調査した。SB13を切り、SK96に切られる。規模は5.0m×4.8mで、平面形は円形を呈す。主軸方位はN27°Eを示す。検出面から床面までの掘り込みは約18cmで、ほぼ垂直である。床は全体的にロームを固く締めている。周溝は北側壁下を中心に検出した。住居址内でのピットは7基確認されたが、主柱穴と思われるものはP1～P6の6基である。中央より南側のP2に近接して埋葬が検出された。底部を穿孔した深鉢が正位で埋設されており、口縁部に人頭大の扁平な石が乗せられていた。炉址は中央より北側に寄った位置にあり、炉石は全て抜かれていた。規模は一辺が約1.1mで、方形の石囲炉と思われる。炉址内からは廃棄されたと思われる炉石の一部と土器片が出土している。その他、炉址の南側付近に台石と思われる直径約60cmの扁平な石が置かれていた。

遺物 (挿図10・11・12・16) 住居址中央部の覆土内を中心に出土した。復元個体数は埋葬に使われた中宮系土器の深鉢をはじめとして4個体で、その他下伊那タイプ土器の破片資料が多く出土している。その他、打製石斧、横刃形石器、石錘が出土している。

時期 遺物より縄文時代中期後葉に位置づけられる。

④12号住居址 (SB12) (挿図7)

遺構 2回目の東側調査区の調査時にCC13を中心に検出し、ほぼ全体を調査した。SB11に切られる。規模は5.4m×5.2mで、平面形は円形を呈す。主軸方位はN33°Wを示す。検出面から床面までの掘り込みは約17cmで、ほぼ垂直である。床は全体的にロームを固く締めている。周溝は全体で検出した。住居址内でのピットは9基確認されたが、主柱穴と思われるものはP1、P2、P7、P8の4基である。炉址は中央より北側に寄った位置にあり、北側部分及び炉址内で一部炉石が残存していた。規模は一辺が約1.1mで、方形の石囲炉と思われる。

遺物 (挿図13・14・15・16・17) 住居址中央部の覆土内を中心に出土した。復元個体数は3個体で、長胴となる加曾利E式系の深鉢が多く出土している。その他、土偶、打製石斧、横刃形石器、石錘、中央部に穿孔の痕跡が見られる石製品が出土している。

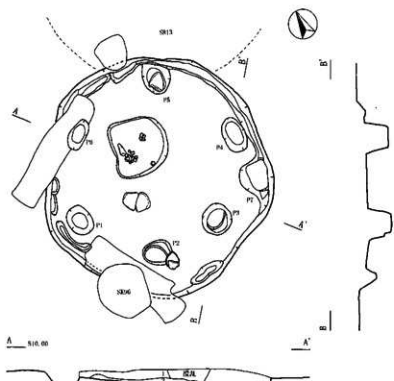
時期 遺物より縄文時代中期後葉に位置づけられる。

⑤11号住居址 (SB11) (挿図8)

遺構 2回目の東側調査区の調査時にCC13を中心に検出した。南東側の一部が調査区外にかかり、また部分的に攪乱を受けており、全体の3分の2を調査した。SB12を切る。規模は検出した範囲で5.3m×4.7m、平面形は隅丸方形を呈す。主軸方位はN50°Wを示す。検出面から床面までの掘り込みは約7cmで、ほぼ垂直である。床は貼床で、固く締められている。主に北東部に残存していた。周溝は北東側壁下部分で一部検出した。住居址内のピットは6基確認されたが、主柱穴と思われるものはP1～P3である。炉址は中央より北側に寄った位置にあり、直径約52cmの円形を呈す。南側には長さ40cmの炉縁石が見られ、炉址内からは焼土が検出された。

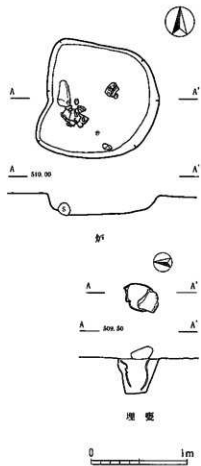
遺物 遺物は出土していない。

時期 遺構の形状より弥生時代後期に位置づけられる。

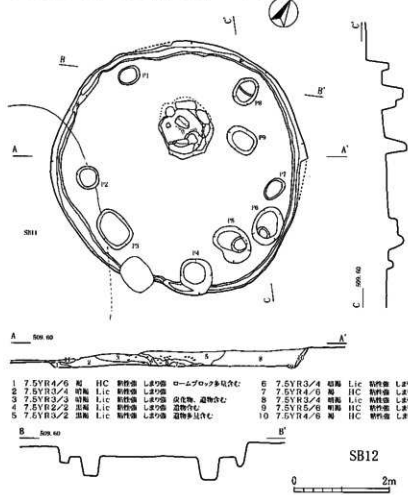


- 1 7.5YR3/4 暗黒 Sic 粘状土 しまり弱 遺物多量含む
 2 7.5YR4/4 黒 HC 粘状土 しまり弱 ロームブロック多量含む

SB09

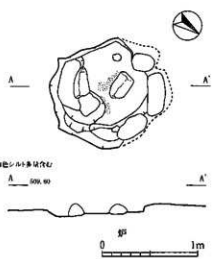


埋設

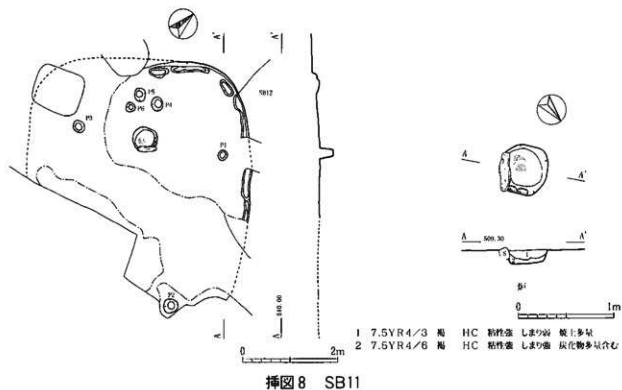


- 1 7.5YR4/6 黒 HC 粘状土 しまり強 ロームブロック多量含む
 2 7.5YR3/4 暗黒 Lic 粘状土 しまり強
 3 7.5YR3/3 暗黒 Lic 粘状土 しまり強 炭化物、遺物含む
 4 7.5YR2/2 黒 Lic 粘状土 しまり強 遺物含む
 5 7.5YR3/2 暗黒 Lic 粘状土 しまり強 遺物多量含む

SB12



挿図7 SB09・12



(2) 土坑

①土坑96 (SK96) (挿図9)

遺構 CB09を中心に検出した。SB09を切る。長径1.2m、短径1.1m、深さ40cmを測る。平面形は不整形円形、断面は台形を呈す。

遺物 土器破片資料が少量出土している。

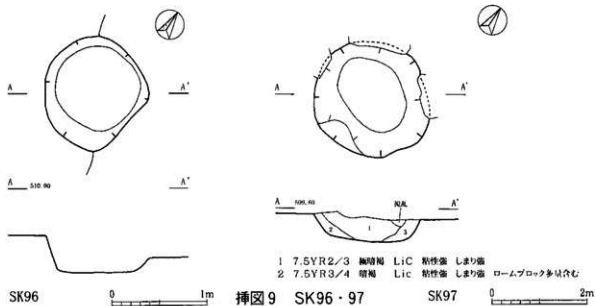
時期 遺物より縄文時代中期後葉に位置づけられる。

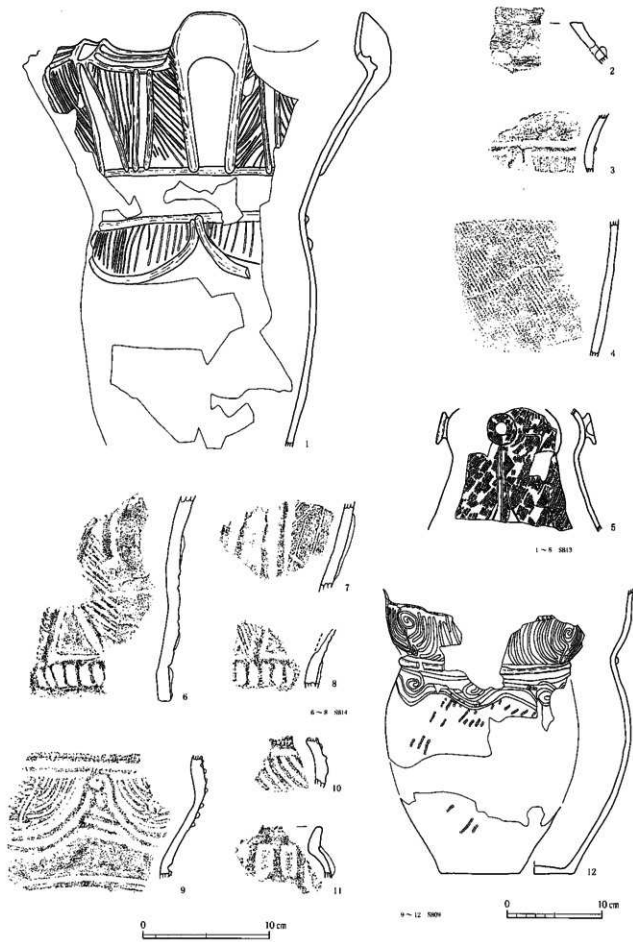
②土坑97 (SK97) (挿図9)

遺構 CA07を中心に検出した。長径2.6m、短径2.4m、深さ70cmを測る。平面形は不整形円形、断面は台形を呈す。比較的大形の遺構であり、覆土からも遺物が多く出土している。

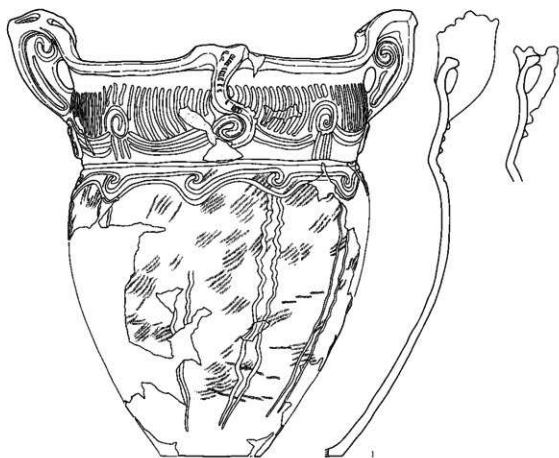
遺物 (挿図15・17) 中葉から後葉にかけての土器破片資料と球状土製品が出土している。

時期 遺物より縄文時代中期後葉に位置づけられる。





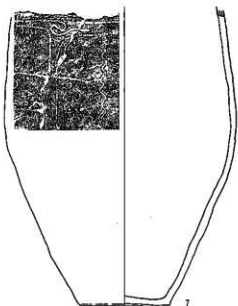
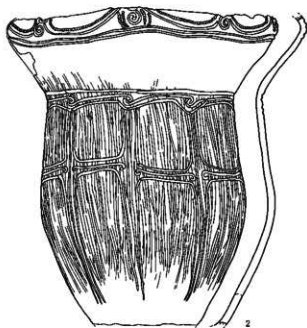
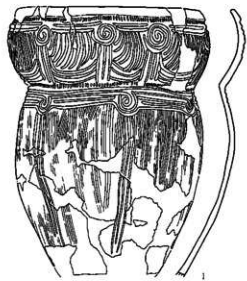
挿図10 出土遺物



1 ~ 2 1/2000

0 10 cm

挿図11 出土遺物

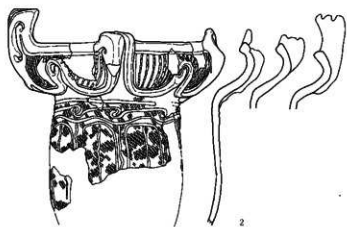
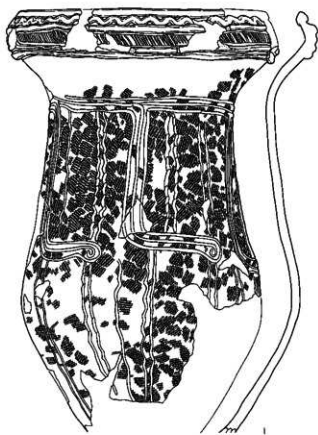


1~13 3009

0 10 cm

0 10 cm

挿図12 出土遺物



1~2 582

0 10 cm

挿図13 出土遺物

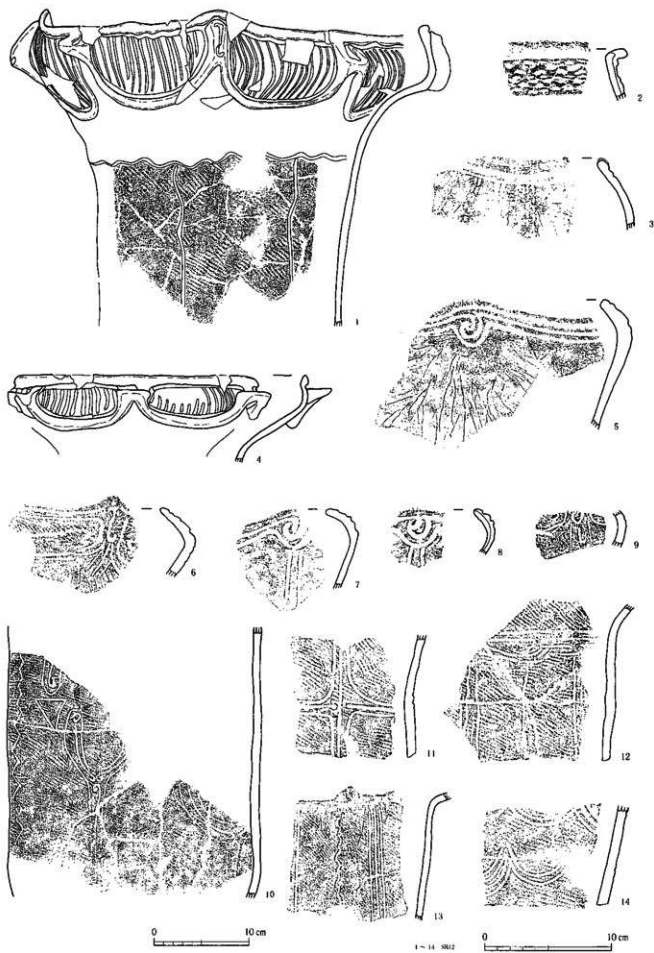


插图14 出土遗物

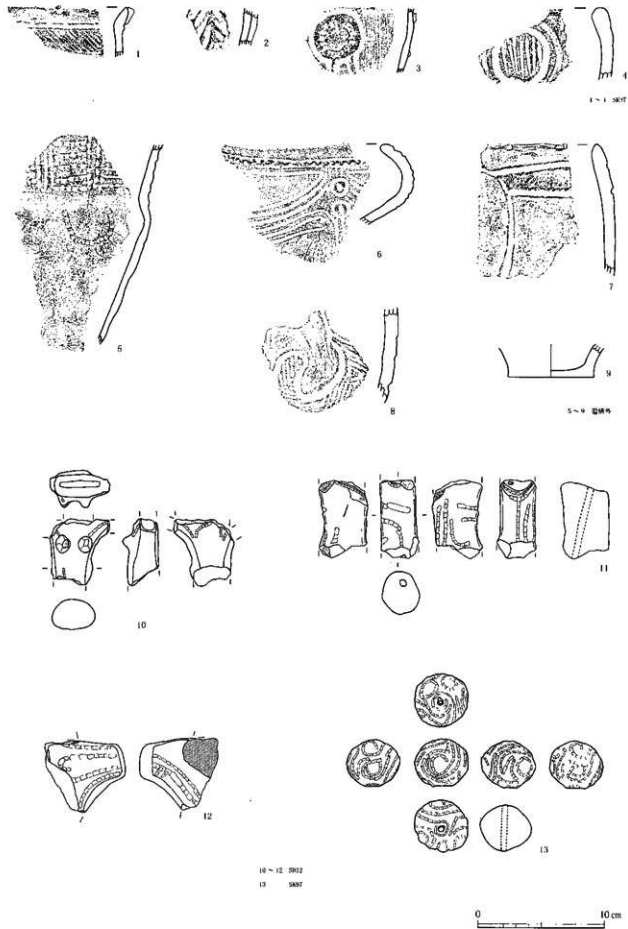
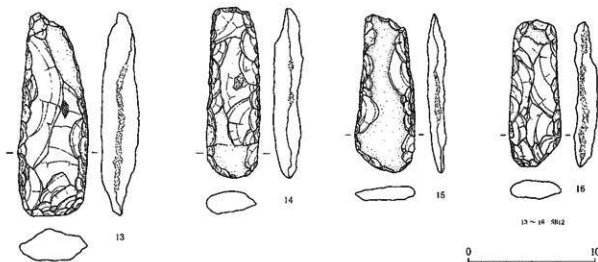
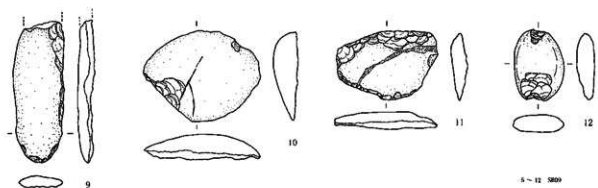
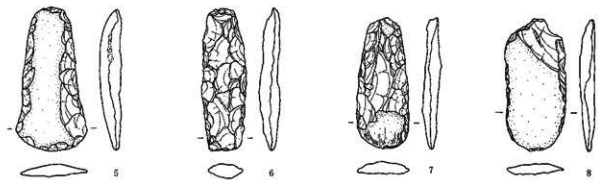
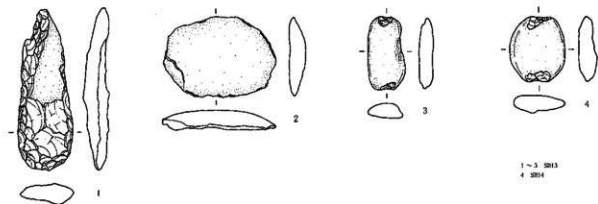


插图15 出土遗物



0 10 cm

挿図16 出土遺物

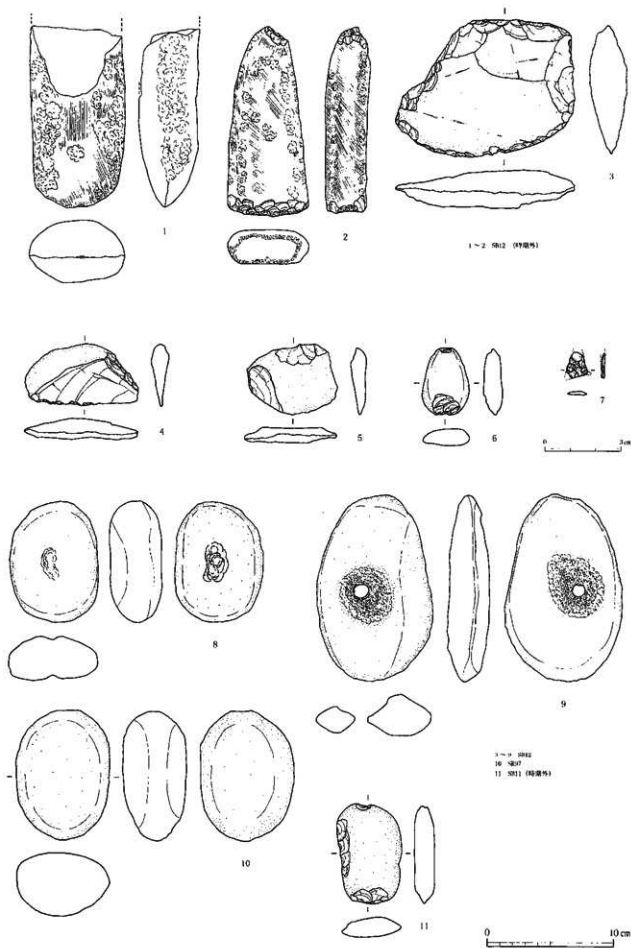


插图17 出土遗物

第4章 まとめ

第1節 これまでの栗屋元遺跡における調査

栗屋元遺跡では、今次調査以前の上郷町時代にも発掘調査が実施されている。

昭和60年度は、町道辻線の改良工事に先立つ発掘調査が行われ、縄文時代中期中葉と思われる竪穴住居2軒と、中世穴蔵、近世建物址等が調査されている。昭和61年度は、信越郵政局宿舍建設に先立つ発掘調査が行われ、奈良時代の竪穴住居1軒、縄文時代から弥生時代にかけての土坑等が調査された。この時の調査区は、今次調査区の南東側に位置し、縄文時代中期の集落址の確認が期待されたが、結果的には遺物の出土にとどまった。しかし、この調査に関する報告書には参考資料として今次調査区周辺と思われる「障子垣外地籍」の採集資料が提示されており、破片資料ではあるが、縄文時代中期中葉末から後葉にかけての遺物の出土がみられ、今次の調査結果を検討するうえで貴重な資料である。昭和62年度には、町道辻幹線の改良工事に伴う発掘調査が行われ、縄文時代中期中葉末の竪穴住居2軒をはじめとする該期の土坑等の遺構・遺物が調査されている。

第2節 9号住居址、12号住居址出土の出土土器について

飯田・下伊那地域における縄文時代中期後葉の土器編年については、過去より多くの研究者が取り組み、幾つかの編年案が示されている。近年では吉川金利が「下伊那縄文中期後葉に於ける土器様相と編年」(2003 吉川)を発表しており、これにより基本的な編年案は確立されたと言える。よって、今次調査で竪穴住居址より出土した土器について吉川編年に基づき若干の検討を行う。

今回調査を行った9号住居址、12号住居址より出土した土器群は編年的にはⅡ期に位置づけられる。該期は前段階における中葉末の影響がなくなり、実質的に中期後葉が始る時期と言える。この段階の大きな特徴としては、次段階以降の編年において主要となる型式の祖形が多く出現する点にある。これは、周辺地域の土器文化を積極的に取り入れ、その影響をうけた独自の型式を多く作り出したことを意味するものであり、前段階に続く「細隆線文土器」の他、「中富式系土器」「加曾利E式系土器」「下伊那タイプ土器」が新たに出現する。

9号住居址からは「中富式系土器」と「下伊那タイプ土器」の出土が特徴的である。中富式系土器は埋嚢として使われた1個体(挿図12-2)と破片資料での出土で、下伊那タイプ土器は覆土より1/2以上復元された個体数で4個体(挿図10-12, 11-1・2, 12-1)出土している。中富式系土器は、東海地方の編年による中富Ⅱ式に比定されるもので、本来は地文に燃糸文が施文されることを条線文で施文されている点が在地化された様相を示している。下伊那タイプ土器は、把手を持つもの、持たないもの、胴部地文に縄文が施文されるものと条線が施文されるものが見られ、形式的に細分される。また、口縁部の渦巻文隆帯が沈線化されているものも見られ、型式の中で若干の時期差が存在する。

12号住居址からは「加曾利E式系土器」の出土が特徴的である。覆土より1/2以上復元された個体数は3個体であるが、その他で口縁部を中心とした破片資料が多く見られた。この土器群は、在地化されているが、頸部に無文帯を持つ加曾利EⅡ式土器の影響を強くうけているもの(挿図13-1)と、口縁部文様帯を太い隆帯によって弧状に区画し、その中を縦の沈線及び押し引き状の沈線で施文しているもの

の(挿図13-2, 14-1)に大別される。前者の土器はその全容がわかるものが1個体であるが、胴部が非常に長胴化しているのが特徴的である。このような加曾利E式土器に類似し、胴部が長胴化している特徴を持つ土器群は松川町の里見V遺跡14号住に代表されるように下伊那北部で多く見られ、近年では「下伊那北部タイプ土器」(2005 吉川)として注目されている。後者の土器群については、周辺地域の他の遺跡でも散見され、前者と類似した形式をもつことからこれまで加曾利E式系土器の範疇で捉えられていた。しかし、口縁部を太い隆帯により弧状に区画し、縦の沈線を施文する文様は多少の差異は認められるものの一つの大きな特徴として注目すべき点であり、今後は新たな型式設定も視野に入れて注意深く見ていく必要がある。

上記でも述べたように9号住居址は「中富式系土器」と「下伊那タイプ土器」が主体となる遺構であり、12号住居址は「加曾利E式系土器(下伊那北部タイプ土器)」が主体となる遺構である。大枠の土器編年ではⅡ期という時期区分で共通する両遺構であるが、整理作業を通じて興味深く感じたことは9号住居址では「加曾利E式系土器(下伊那北部タイプ土器)」がほとんど見られず、逆に12号住居址からは「下伊那タイプ土器」がほとんど出土していなかった点である。この2軒の住居址に見られる型式組成の差を時期差とみるか、別の要因とみるかは現段階では断定できない。この事は他の遺跡との比較検討が必要であり、今後の重要な課題として捉えておきたい。

第3節 遺跡の様相

(1) 縄文時代

今回の調査では、縄文時代中期中葉末に比定される住居址が2軒(13、14号住居址)と後葉に比定される住居址が2軒(9、12号住居址)調査された。

中期中葉末の13号、14号住居址は床面のみの確認であったが、13号住居址から細隆線文土器(挿図10-1)と型式不明の瓢箪型深鉢(挿図10-5)が出土したことが注目される。細隆線文土器は大門原遺跡30号住居址出土の深鉢と類似しており、中葉末から後葉Ⅰ期の移行期に位置づけられる土器である。また、瓢箪型の深鉢は、器面全体に縄文が施文され、ボタン状の突起を持っており市内の遺跡では例を見ない土器であり、型式等は不明である。ただ、上伊那郡飯島町の丸山遺跡1号住居址からは沈線の文様が異なるのみで器形等がほぼ同一と思われる土器が長野県では南限とされる大木8b系の土器と共伴して出土しており、大木系土器との関係を考える上で注目すべき土器といえる。該期の集落については、今次調査区の南側に位置する昭和62年度調査区で細隆線文土器を伴う住居址が調査されており、西側に野庭川に面する段丘端部であることから、南東部の段丘中央部に集落が展開しているものと推測される。その他、遺跡の北側に位置する見城垣外遺跡においても、平成11年度調査で該期の住居址が1軒調査されており、小規模な集落が周辺にも点在している。

後葉については、確認されている住居址が今回の2軒のみであるが、周囲における遺物散布状況から考えて中葉末同様南東部の段丘中央部へ集落が展開していると推測される。今回の調査では一時期の遺構が確認されたのみであるが、調査区周辺では結節縄文が施文されたほぼ完形の深鉢が出土しているなど後葉の数時期にわたる遺物の存在が知られており、比較的長期間にわたり集落が営まれていた可能性が考えられる。

(2) 弥生時代

今回の調査では弥生時代後期と思われる11号住居址を検出した。該期については、それまで天竜川流域の沖積地で稲作を背景とする集落が営まれていたのが、段丘上段の洪積地へ集落が展開する時期である。当遺跡の南側に位置する高松原遺跡では拠点集落とも言うべき大規模な集落が営まれていた。このような拠点集落の周辺に小規模な集落が点在しており、今回調査した遺構も小規模集落の一端であると推測される。

今回の調査では、縄文時代から弥生時代にかけての集落の変遷を見ることが出来た。特に縄文時代については、4軒の竪穴住居址と豊富な土器資料を得られ、類例の少ない後葉前半の様相を明らかにしたことは大きな成果であった。

最後になりましたが、13号住居址出土の土器について長野県立歴史館の水沢教子さんに御教示賜りました。記して感謝致します。また、本調査を実施するにあたり文化財保護の本旨に多大なるご理解、ご協力をいただきました長谷川昌博さんには深く感謝申し上げます。

引用・参考文献

- 飯田市教育委員会 1999 『三尋石遺跡Ⅲ』
飯田市教育委員会 1999 『三尋石遺跡Ⅳ』
飯田市教育委員会 1999 『大門原遺跡』
飯田市教育委員会 2001 『妙前遺跡』
上郷町教育委員会 1986 『栗屋元遺跡』
上郷町教育委員会 1990 『柏原C遺跡 栗屋元遺跡 橋爪遺跡』
上郷町教育委員会 1988 『平畑遺跡 八幡原遺跡』
上郷町教育委員会 1989 『ソルサシ ミカド 増田 垣外遺跡』
長野県教育委員会 1972 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』下伊那郡松川町地内
(財)長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センター 2003 『丸山遺跡』
飯田市上郷考古博物館 2005 平成17年度秋季展示 下伊那唐草文土器 図録
神村 透 2003 「下伊那系(タイプ)土器は唐草文系土器ではない
—地域差ではなく、独自のもの—」 長野県考古学会誌101
末木 健 1978 「伊那谷中部縄文時代中期後半の土器群とその性格—子察—」信濃30—4
増子康真 2002 「東海西部と下伊那の縄文中期後半の交流」2002年長野県考古学会秋季大会
「伊那谷の縄文中期後葉における東西交流文化」レジュメ
吉川金利 2003 「下伊那縄文中期後葉に於ける土器様相と編年」長野県考古学会誌102
吉川金利 2004 「伊那谷南部の中期中葉から後葉への移行期の土器」

シンポジウム縄文集落研究の新地平3 発表要旨



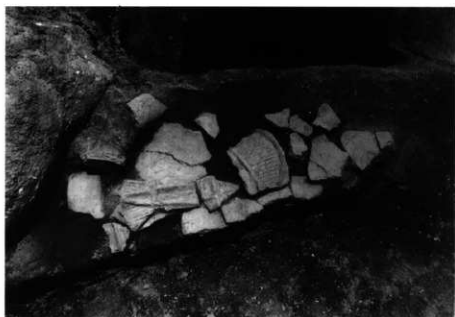
遺跡遠景



調査前風景



SB13



SB13
遺物出土状況



SB14



SB09



遺物出土状況



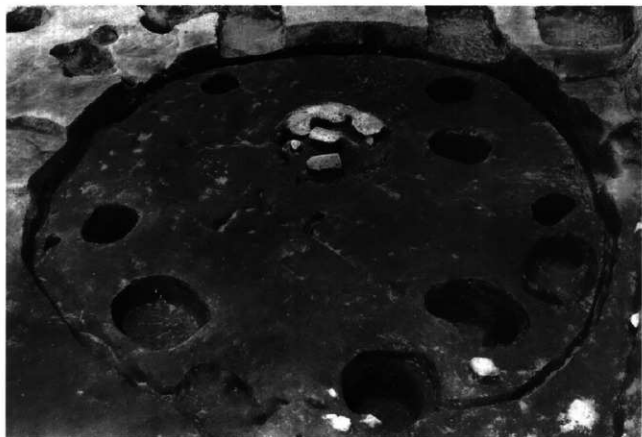
遺物出土状況



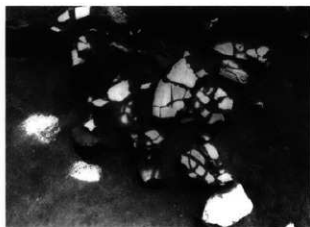
埋甕



炉址



SB12



遺物出土状況



遺物出土状況

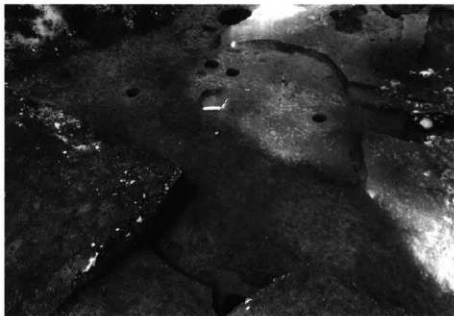


遺物出土状況



炉址

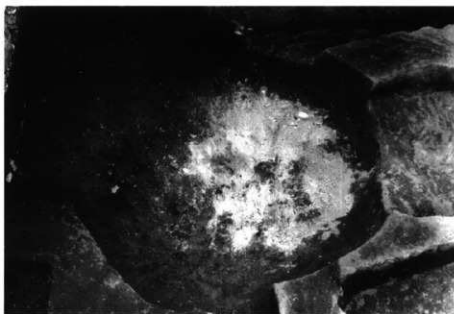
SB11



SK96



SK97





調査区全景（西側）



調査区全景（東側）



重機作業風景



作業風景



現地説明会



SB13



SB13



SB14



SB09



SB09



SB09



SB09



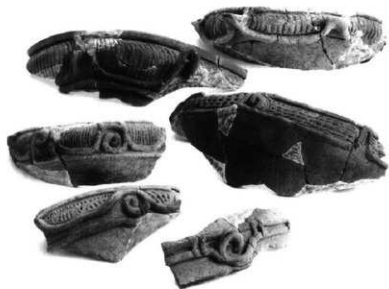
SB09



SB09



SB09



SB12



SB12



SB12



SB12



SB12



SB12 (土偶)



SK97 (球状土製品)



SB09



SB12

報 告 書 抄 録

ふりがな	くりやもといせき							
書 名	栗屋元遺跡							
副 書 名								
巻 次								
シリーズ名								
編著者名	坂 井 勇 雄							
編集機関	長野県飯田市教育委員会							
所 在 地	〒395-8501 長野県飯田市大久保町2534番地 Ⅷ0265-22-4511							
発行年月日	西暦2006年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市 町 村 遺跡番号						
くりやもといせき 栗屋元遺跡	いいだし かみさと 飯田市上郷	20205		35° 31' 08"	137° 50' 09"	平成16年 4月6日から 平成16年 4月26日	220㎡	集合住宅 建設
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特 記 事 項			
栗屋元遺跡	集 落	縄文時代 中期中葉末 縄文時代 中期後葉 縄文時代 中期後葉 弥生時代 後期	住居址2軒 住居址2軒 土坑2基 住居址1軒	土器・石器 土器・石器 土製品	縄文時代中期後葉を 中心とした集落址の縁辺部			

栗屋元遺跡

2006年3月31日 発行

編集・発行 長野県飯田市大久保2534

飯田市教育委員会

印刷 杉本印刷株式会社

